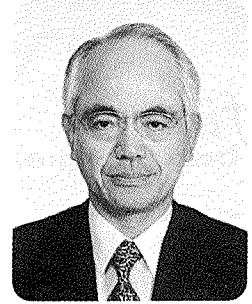


■ 施工技術の伝承について



峯 尾 隆 二*

この3、4年の間に建設業における死亡事故件数が急速に減ってきており、永い間破れずにいた年間1000人以下という目標値をあっさりと700人台にまで減少させてきた。危険に満ちた産業と言われ続けてきた建設業にとって大きな朗報であることは間違いない。これは、現場に携わる技術者および作業に従事する人たちの並々ならぬ努力の賜であると思う。

しかしながら、建設業が若者にとって明るい未来を託せる産業であるかという点、残念ながら現状では否定せざるを得ない状況にあるように思える。これまで技術者、職人に脈々と受け継がれてきた綿密な技術力が伝承されず、多くの建設現場が旧態依然のままの何ら面白味のない職場に墮しているのではないかという懸念をもつからである。私の耳にする範囲でも、壁筋のかぶり不足による耐久力不足を余儀なくさせられているRC構造物の続出や、PC構造物においても新しい設計思想を活かすに十分な補強鉄筋配置に配慮せず施工して、致命的なひび割れを発生させてしまうなど、これまで考えられなかった品質の低下が顕著に現れており、このままでは建設業の将来に翳りを感じるのである。

最近ITの普及により書類作成が容易になった半面、ISOなどの導入による書類煩多の影響もあり、現場技術者が自分たちの技術力を向上させる時間も余裕もないと聞く。これまで若い人たちは、自分で施工図を描いたり、上司について一から教わることで現場のチェック能力が養われてきたが、この良きシステムがこのところ十分に機能してきていないように思える。一つにはJV制度の悪しき適用もあるが、若い人を教育する立場にある40代後半の技術者層が減って、技術の伝承ができないでいることにもありそうだ。また、昔は必ず良き業と工夫を駆使する優秀な職人がいて、若い未熟な技術者を鍛えてくれる場面が見られたものだが、今はそうした人との繋がりが切れてしまっている。そうして見ると、

現場で不具合を生ぜしめない確実な技術と、ものづくりに対する心を伝えることが、高い生産性を誇る魅力ある建設業とするための喫緊な課題と言えるのではないか。

職人の技術力と言えば、私の中学生時代の昭和30年代に、世界中の技能者の集う技能オリンピックで多くの日本人が大活躍し、全国民が酔いしれたことを思い出す。当時、敗戦から立ち上がってきた日本で、その近代化を推進してきた柱の一つが、ものづくりの技術者や、職人の技量の高さであり、それを支えてきたのが彼ら自身の誇りであり、国民全体の気運でもあったように思う。昨年NHKにより「プロジェクトX」が毎週放映され、高視聴率を持続したのも、ここのところとんと忘れていた一心不乱に目標に立ち向かう技術者魂への尊敬の念や、そのロマンに共感を覚える人が増えつつある証左であるように思う。

この技術の伝承ということでは、冒頭に述べた安全性のレベルアップはもちろんのこと、生産性の向上、技術者や技能者の就労環境や処遇改善を図ることによって、若い人たちにとって働きやすい場を提供するとともに、資格制度を充実して社会的な地位向上を図ることで、建設業がやりがいを感じさせ、夢を託せる産業とすることが、その大前提になるように思える。

また、現在すでに建設業にある技術者には、自社におけるITツールを用いた各種技術情報の伝達を強化して、その能力アップを図るとともに、各種の技術講習会、技術発表会等に積極的に参加させることによって、多くの優れた技術者との交流の場を提供するといった継続教育(CPD)を普及させることが急務と考える。わがPC技術協会においても、PC技士の養成はもちろん、取得後の技術力向上のためにCPDプログラムの創設を急ぐ必要があると考える次第である。

* Takaji MINEO：本協会理事，鹿島建設(株) 東京支店 取締役副支店長